

弘大リンゴ南アで育て

新品種・きみと食品商社と連携

弘前大学と大手食品商社のウイスマタックフーズ(本社東京)は共同で、弘大が開発したリンゴの新品種「きみと」の南アフリカでの生産を目指す。弘大生まれのリンゴを季節が逆の南半球でも生産し、1年を通じて世界へ届ける。6〜7年後には現地で育てた試験木で食味検査を行い、本格栽培に着手する予定だ。(赤田和俊)



弘大藤崎農場で栽培されている「きみと」。左は生育状況を見る林田助教

本県と南半球 通年生産目指す



きみとは芳醇な香りと爽やかな甘み、蜜がたくさん入るのが特徴

弘大藤崎農場によると、きみとは「ふじ」と「東光」を交配した黄色リンゴで、2016年に品種登録された。芳醇な香りと爽やかな甘み、蜜がたくさん入るのに口持ちが良いのが特徴。葉取りなどが不要で育てやすく、傷が付にくいいため、輸出品種としても期待されている。津軽地域の一部で栽培が始まったばかりで、まだほとんど流通していないとみられる。

農産物の輸出を手がけるウイスマタックは、年間を通じて新鮮なリンゴを海外

市場に届ける狙いで、南半球に着目。品種の違法流出を防ぐため、栽培体制を厳格に管理できる南アフリカのパートナー会社を生産元に選んだ。20年、弘大と契約を締り、

南アでの育成者権と商標権を取得。今年1月に接ぎ木に使う穂木5本を現地へ輸送し現在、検疫を受けている。同社のパートナー会社は約2年間の検疫終了後、試験栽培を開始する。

ウイスマタックは、現地で増やした穂木の販売時、価格の半数を弘大に還元する。同社事業開発部の呉怡冷氏は取材に「きみとは海外でも好まれる味。新鮮なリンゴを通年で提供し、世

界中でなじみのある品種に育てたい」と、弘大との連携を進めた同社の駒井菜月さん(青森市出身)は「甘さも香りもすごく良い。弘大発のリンゴが世界で人気になっしてほしい」と話す。

弘大藤崎農場の林田助教は「海外でも良さを認めてもらい、ブランドを確立したい。作りやすい品種なので県内でも栽培が広がってほしい」と期待を込めた。

上記の画像は、当該ページに限って”東奥日報”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。